

# 患者を生きる

2950

がん

精巣がんの手術と抗がん剤治療を無事に終えた東京都の大久保淳一さん(51)は2008年春から、勤務先の外資系証券会社の仕事に少しずつ復帰した。

この年の6月、これまでの生き方を変える「転機」があった。通院する東京慈恵会医科大学附属病院(東京都港区)の医師に「入院中の患者さんに会って、励ましてもらえませんか?」と頼まれた。かつて自分が治療で入院していた病棟へ、足を運んだ。「大丈夫ですよ!」。精巣がん

で入院中の男性に、その声をかけた。それまで周囲から励ましを受け続けてきた自分が、初めて「励ます側」になることができた。

私生活では、闘病ですっかり落ちてしまった脚力の回復に取り組んだ。公園でのウォーキングから始め、徐々にランニングの距離を延ばした。12年には茨城県で開かれたフルマラソンに参加。13年6月には、闘病中の目標にしていた北海道で開かれる100キロマラソンへの復帰も果たすことができた。この頃、後に出版される手記

## 仲間支えるサイト製作

### ネットであつながる④

もなった。

「いのちのスタートライン」(講談社)の執筆も始めた。

職場に復帰し、「100キロマラソンを完走する」という目標も実現できた。その一方で、「このままサラリーマンを続けていても、良いのだろうか?」と悩むように

「がんから生還した自分には、もっとやるべき事があるはずだ……」。思い浮かんだのは、情報提供を通じて患者を支援する活動だ。そのため一般社団法人を設立。がん闘病中の人やその家族のための交流サイトを作ることになった。

14年夏、長年勤めた外資系証券会社を退職。知人のIT技術者、山本晃さん(36)と一緒に、がんの闘病経験を紹介するサイト「5 years」の製作を始めた。

がんの告知以来、様々なサイトを閲覧してきた。そして強く感じたのは、「がんを乗り越えて元気に社会で活動している人の情報が少ない」との思いだった。ならば、自分でそういう情報を集めたサイトを作ってみよう。

「生かされた者として、これからは社会への恩返しをしよう」。そう心に決めた。

(山本智之)



体調が回復し、北海道で100キロマラソンを完走することができた。13年6月、本人提供